

## 悩ましい部活動顧問だが・・・、部員たちは成長する

森 均

前回（第 143 号 2024 年 2・3 月）では、初めての分掌経験について述べた。教員にとって教科指導力を高め続けることは当たり前だが、それだけでは教員集団から一定の評価は得られるもののスクールリーダーとしては認められない。分掌では、目的は同じでも意見の異なる先生方をまとめ、計画を立案し実施していく力も求められるわけで、その意味で分掌経験を積み上げていくことは重要なものである。

一方で、部活動の顧問は悩ましい。部活動の設置・運営は、法令上の義務として求められるものではなく、必ずしも教師が担う必要のない業務と位置付けられているからである。しかし、部活動は学校教育の一環として、学習指導要領に位置付けられた活動であり、部活動に参加する生徒にとっては、スポーツ、芸術文化等の幅広い活動機会を得られるとともに、体力や技能の向上に資するだけでなく、教科学習とは異なる集団での活動を通じた人間形成の機会でもある。また、生徒の自主的、自発的な参加により行われるものであり、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものでもある。実際にそのことを実感するのであるが・・・。

さて、4月に赴任して早々、部活動の顧問について調整する担当教員から打診はあるが、講師、新規採用教諭、異動してきた教諭が集められて、調整が行われる。結果としては顧問の人数が少ない部の顧問に就任してほしいと言われる。残っている部はたいがい運動部で、私の場合は2人目の顧問として卓球部を担当することになった。

赴任校では、2週間に1回、木曜日に職員会議、火曜日に科会が行われていたし、分掌の会議も行われるので、それ以外の曜日に練習を見に行くことになるのだが、授業の準備でなかなか行けなかった。もう一人の顧問は30代後半の方で15年以上の経験があり中堅としてさまざまな業務をされていたので部活動の顧問どころではなかった。

卓球部の練習場は狭く、卓球台を1台置くとロングラリーができない状況だった。それでも生徒たちは毎日熱心に練習し、練習試合を申し込み、公式戦にも積極的に参加した。私が顧問として付き添うわけであるが、練習試合や公式戦は日曜日に開催されるし、公式戦の場合は会場も遠いので、朝早くに自宅を出ることが多かった。公式戦では、個人戦と団体戦があり、トーナメント方式で行われるので、勝ち残れば勝ち残るほどベスト32、ベスト16に近づくわけであるがそれだけ帰宅時間が遅くなるわけである。

夏には、淡路島で公営の体育館を貸し切り3泊4日の合宿があり、最終日に地元の高

校と練習試合をすることが慣例となっていた。体育館や民宿の予約、泊を伴うので教育委員会への提出書類の作成、保護者の同意書、参加費用の計算、徴収、JR等の団体割引乗車券の用意、緊急連絡網等、様々な業務が次々にわいてくるが、先輩教員に教わりながら一つ一つこなしていく。

教員の仕事が多岐にわたることを実感しながら、生徒たちと一緒に汗をかいたが、私の卓球の実力は部員 20 名中、下から 3 番目位だった。しかし、淡路島での合宿では、私は部員と同じ練習メニューをこなした。しかしそのひずみは右足薬指にきた。爪がはがれたのである。以来、右足薬指は私にとって諦めた存在であった。

気づいたのは約 30 年後である。右足薬指の爪が成長を続け元の形に戻りつつあることに気づいたのである。

今はよみがえった桜色の爪を見るたびに、35 年以上の前の部員たちの顔が浮かぶ。部員たちの成長はめを見張るものがあった。おどおどしていた新入部員たちが 2 年生、3 年生と進級するにつれて、部長、副部長、会計、庶務といった役割を果たしていく。公式戦で勝ち抜くことを目標にする部員もいれば、楽しめたらよいと考えている部員もいて時々部の運営について軋轢が生じた。でも公式戦の団体戦で、2 対 2 で迎えた最後の試合、つまりキャプテン同士の戦いになると、部員たちの気持ちは一つになり最高潮に達するのである。

一方で部活動顧問のやりがいを感じつつも、学級担任になるとだんだん仕事が増え休日の付き添いが大きな負担となってきた。そんな折り、保健体育の教員で卓球専門の方が赴任してきたのである。部活動の担当顧問を調整している教員は担任業務で走り回る私の状況を見て、顧問が 4 人いる山岳部の顧問に変更してくれたのであった。

---

(もり・ひとし 教授)

---